



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.169  
2017.10.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## ● 神村 透

## 田舎考古学人回想誌

57

(最終回)

## 「藤森栄一特別賞をいただいて」

私の卒業した飯田高校では卒業式に文化系・体育系の部(班)長を表彰している。私は4月当初は郷土班の班長でしたが卒業式の日私一人だけ名前を呼ばれなかった。それには理由があった。当時 新制高校として飯田高校は生徒中心の斬新な制度を実施していた。毎年クラス替えをし、4月当初学年ごとに担任教師を発表し、担任を中心に一週間の時間割を生徒に渡して、生徒は自分が入りたい担任を選んでその先生の教科を入れた時間割を作成した。私は友人と相談して担任を入れた時間割を作り3年間同じクラスとなった。私は2年の時3年の地学を選び3年生の中に一人入って授業を受けたり、選択教科は自由と聞いて2・3年では選択しなかった。そのため一週間の中に空いた時間があり、その時間は部室で過ごした。食べたい盛りの自分はいつも早弁をしていた。昼食時に我慢できなくて学校近くの食堂にいったり、パン券や米を家から持ち出しコッパンに変えたりご飯を炊いてもらっていた。6月頃空き時間に部室にてコンロでご飯を炊いたら煙が外に出て、隣が教員住宅でしたので煙を見た先生たちが火事だと駆けつけて私は見つかった。結果郷土班は休部になり部室は取り上げられた。そのため卒業式に私の名前は呼ばれなかった。友人が呼ばれていく中私一人淋しく椅子に座っていた。

退職して何年かたってどこかの教育委員会が推薦してくれたのでしょう。毎年の長野県教育委員会の教育功労賞の文化財部門で県下で私ともう一人の二人選ばれて県庁での表彰式に出席した。賞状と銀杯を貰ったが、退職記念の銀杯と全く同じで賞状は筒に入れてしまったままで銀杯は捨てた。そんなに嬉しくなかったためでした。

平成25年3月 長野県考古学会藤森栄一賞選考会があり、その年の受賞者を全国の推薦委員からの候補者の中から選んで決める。私のところに委員長から電話があり今年の藤森栄一賞に先生が選ばれたという。そんなことは絶対ない



と思っていたので理由を聞くと、いわゆる受賞者ではなく特別賞で私と桐原健さんの二人だという。長野県考古学会が創立50年で創立に係わった二人にとのことでした。創立には私と樋口さんが最も関係していたのでともにと思ったが、聞くと樋口さんが亡くなった時に特別賞をあげて奥さんが授賞式に出席したという。理由を聞いて私はいただくことを納得して返事した。5月12日の総会通知が全会員にとどき藤森賞授賞式が、受賞者富山県の西井龍儀さんと特別賞神村透・桐原健の名前がのっていた。それをみて会員の幾人かが電話や便りでおめでとうと祝福が寄せられて嬉しかった。

12日考古学会出席のため長野県県立歴史館に出かけた。篠ノ井駅でしなの鉄道に乗り換えのため降りてホームにでるとびっくりした。兵庫県の片山昭悟さんが居た。聞くと私に会ってお祝いを言いたいために来たという。遠くから朝早く出かけて来てくれた気持ちが本当に嬉しかった。岡谷市大久保遺跡出土の八花鏡で結ばれた縁を大事にしてくれている片山さんでした。授賞式が終わってすぐ帰られた。3日ご授賞式の写真を送ってくれた。早速アルバムにはった。控室で桐原さん・会田君・笹沢君と話していると京都の同志社大学鋤柄俊夫さんがお祝いの挨拶にと寄ってくれた。下伊那出身で中世陶磁器での縁を大切にしている繋がりである。県内会員の出席が少なく恥ずかしい人数の中で県外からの二人は本当に嬉しかった。

『貴殿は長年にわたる考古学研究や文化財保護活動において多大なる業績を残されるとともに長野県考古学会並びに藤森栄一賞の発展に寄与されました よってここにその功績をたたえ感謝の意をこめて第三八回藤森栄一賞特別賞を贈ります 長野県考古学会』の文が書かれた賞状をいただき、寝室の壁に飾って毎日みている。

考古学が好きになって71年、多くの先生・学兄・学友に出会い教えられ、数え切れない内容のある遺跡に関わり学んできた。こんな田舎考古学者を暖かく受け入れ書かせてくれた角張淳一さんに厚く感謝する。また考古学は嫌いだと言うも訪ねてくる学友・学生を暖かく受け入れくれた家内にも「ありがとう」。

私の回想記はここで終わりにします。拙文を長年にわたり読んでくださり感謝です。

神村先生、素晴らしい記録を元に長い間ご連載をいただき、厚く感謝申し上げます。  
171号からは大村裕先生にお願いいたしました。お楽しみに!

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

## 目次

■田舎考古学人回想誌 藤森栄一特別賞をいただいて	神村 透 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第162回)	野原大輔 …3
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第20回) 岡田淳子 …2		■考古学者の書棚 「日本庭園の歴史と文化」	平田博幸 …4

## 考古学の履歴書

## 過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第20回) 岡田 淳子

## ⑩ウオームチャック廃村遺跡

ウオームチャック入江にある廃村は、トリンギット族のかつての夏のキャンプ地であった。この人たちは本拠地の家から壁板を運んで、漁撈キャンプの建物を造ったと言われている。

以前この村に住んでいたと証言している女性、フローレンス・デンマートによれば、19世紀末のことらしく、地表面の土を落ち葉とともに剥がすと、確かに19世紀末頃と思われる遺構が現れ、住居と考えられる一軒とそれより小さい建物跡二か所が存在した。たぶん燻製小屋と倉庫であろう。この三軒の他に舟を引き上げる滑車つきのワイヤーとレール、20世紀半ばにトーテム公園に移された「ワタリガラスとカジカのトーテムポール」が付属していたものと思われる。

私たちが興味を持ったのは、それより古い700BP前後の遺構の一群である。一群とは地中に掘り込まれた建物跡と外側にあったサケ(鮭)の骨を多量に含んだ層、サケを捕らえるための石堰、そしてチャッククリークの河口にあるウオーター・ベア(Water Bear)の岩絵であった。

石堰は、チャッククリークの左岸に続く海岸沿いに2か所あって、サケたちは上げ潮の海をこの付近まで来ると、満潮時に石囲いの中に入って泳ぎ回っている。そして干潮時にこの中に取り残されたサケを捕らえるのである。当地域の海岸では河口の近くにこのような石の遺構を、たまに見かける。干潮が進むにつれて石囲いの中の水が無くなり、その時にサケを魚槍で突いたり頭をたたいたりして、一時に大量に捕獲する。

捕らえたサケは頭と内臓と骨を除き、身に切り込みを入れて燻製小屋で干す。湿度の高い降雨林の中なので干すだけでは乾かず、小屋の中では何時も火を焚いている。この時期の窪みに、魚骨層があった。他のものをほとんど含まない純魚骨層だったので、この塊をすべて掘りあげて金子浩昌氏に鑑定を依頼した。金子さんはサケの第1脊椎を数えて、759尾という数を明らかにされた。おそらく1シーズンの漁獲数が示されたものと考えられ、最高の得難い結果であったと感謝している。

クリークの右岸に続く河口に、何処かから落ちたような大きな岩があった。岩の平らな面に掘り込んだ絵が描かれている。岩に登って拓本を取ると、丸い耳を持つ動物の顔と、たくさんの泡状のリングが認められた。動物は「ウオーター・ベア」だと土地の人は言うが、文献に「シー・ベア(Sea Bear)」とあるのと同じとみられ、水の中にいて鮭を守っている想像上の動物である。この岩は、満潮時は水の中に沈み、干潮になると水面に姿を現す。

ウオームチャックではもうひとつBP1350年前後の実年代も出たが、そこでは陸獣の骨のみが発見されていた。サケの漁撈を中心とする村ができたのは700年前頃、すなわち12～13世紀になってからと考えることができ、北西海岸文化伝統の始まりを示唆しているのかも知れない。それより古い遺跡では貝塚は発見されるが、北西海岸文化につながるような証拠は、私たちの調査では何も発見されなかった。

三年目のシーズンにはヘクタ島を離れ、プリンス・オブ・ウェルズ島の南端、「ハンターベイ遺跡」の調査を手掛けることに



▲ウオームチャックで岩絵の拓本をとる(左下が岡田) 1989年

なった。国有林の考古学者から信用を得たためか、未調査の地域での遺跡調査を依頼された形である。交通の便もなく、もちろん宿泊施設もないところだった。私たちのクルーに国有林の「レンジャー・ポート」が提供され、船長兼調理師が一人ついて一日三食が準備された。6人寝泊りできる船が、遺跡の前の入り江に錨を下ろし、私たちは宿泊のことを心配せずに作業を進めることができたのである。

海辺に近い森の中の貝塚で、発掘自体はそれほど難しいものではなかったが、測量には苦勞し、当時シン航空測量に勤め、それを専門にしている宮塚義人氏の力を借りた。貝塚の年代は2200BPから1400BP。森林内の樹木根を避けての発掘なので、ここではトレンチを二か所掘るにとどまった。

私たちは、はからずも米国北西海岸で、8000年前から1400年前までの貝塚4か所を調査し、日本と同じように変化する地点貝塚、斜面貝塚、そして海に近い平地貝塚の様子を確かめることができたのであった。

遠征の常として期間中は調査に専念するスタイルを繰り返してきたが、今回は日曜になると、国有林の考古学者が小型のボートでやってきて、見学遠足に連れ出してくれた。文献でしか知ることのなかったハンターベイ近辺の古い村、クリンクワンの跡や、それに付属する墓地のある島などをボートで周って見学し、得難い経験を重ねた。大型木造住居の土台を調べ、そこで使われていたヨーロッパ製磁器などの遺物も採集している。

1990年の夏、私は左脚に異変を感じ始めた。前年まではトラックの荷台に飛び乗ることもできたのに、小さなボートから降りるのにも苦勞するような有様で、もう発掘は出来ないと覚悟を決めた。長年、手伝ってもらった後輩、塩野崎直子さんにその年も助けられ、心置きなく考古学の現地調査を終えることができた。

略歴	
1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961～64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964～66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967～77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978～88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988～2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010～2017年	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。



## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 162

## 景帝陽陵 ～中国陝西省咸陽市～

野原 大輔

灼熱の5月、私は巨大な墳丘の前に佇んでいた。

どこまでも続く麦畑に、突き抜けるような高い空。中国大陸特有の雄大な景色だ。目の前に聳えるのは、山のような皇帝の墓ただ一つ。周りには人家はなく、空港まで続く1本の道が横たわるだけ。西安の雑踏も、上海のジャズも、ウルムチの民族舞踊も聞こえてこない。ただ無音の世界が広がっている。まるで時間が止まったかのようだ。

中国陝西省の咸陽原。前漢皇帝の墳墓十一陵が、首都長安(現在の西安市)の北西地方にある。渭水北岸の40km範囲内に九陵、霸水の西岸に二陵が存在する。前漢は紀元前206年から紀元8年まで存続した中国の王朝。日本では弥生時代中期にあたる。

ここで前漢皇帝陵を概観しておきたい。前漢初代皇帝高祖劉邦は宮都である未央宮を造営し、その真北の咸陽原に長陵を築いた。第二代恵帝はその西側に安陵を建てるが、第三代文帝はその出生の関係で霸水の西に山陵である霸陵を造営する。第四代景帝は、長陵の東側に造墓。第五代武帝と第六代昭帝は西側にそれぞれ茂陵と平陵を営む。第七代宣帝は武帝の曾孫に当たることからこの地に入らず、霸水の西岸に杜陵を営む。第八代元帝は咸陽原に戻り、渭陵を建て、以後三代が延陵・義陵・康陵と続いて前漢の歴史は幕をおろす。

皇帝陵は、昭穆制(しやうぼくせい)に則って配置される。昭穆制とは、中国の宗廟での霊位の席次のことで、太祖を中央とし、向かって右に2世・4世・6世などを並べて昭と呼び、左に3世・5世・7世などを並べて穆と呼ぶ。極めて明確な基準に基づいて墓の位置が決まる。日本では弥生・古墳時代にマウンドをもつ墳丘が数多くつくられるが、古墳群内での位置関係や序列は判然としない場合が多い。個人的には、少なからず昭穆制の影響があるのではないかとひそかに考えている。ただし、墓誌を伴わない日本の古墳では被葬者を特定する事は難しく、検証は容易ではない。

さて、文中冒頭に登場する墳墓は、第四代景帝の陽陵(陝西省咸陽市北東)のことである。景帝は、前漢の皇帝(在位前157～前141)で劉啓(りゅうけい)といい、文帝と竇太后との子として生まれた。前漢の全盛期を築いた武帝の父でもある。義を施し

固い意志をもった政治を行ったので、景帝と諡(おくりな)された。父の文帝と後継の景帝の時代の40年間は政治が安定し、社会も持続的に発展したため、「文景の治」と並び称され後世までその仁政が称賛された。

景帝は死後、陽陵に埋葬される。その墳丘は巨大の一言に尽きる。1辺160～170メートル、高さ32メートルの方墳である。その規模を数字だけでみると大したことがないように感じるが、日本の方墳を見慣れた目で見ると、墳丘の傾斜に仰け反りそうになる。陽陵に限らず、前漢皇帝陵の墳丘の傾斜は急角度だ。それは、強固な版築がなされているからに他ならない。なので墳丘の前に立つと、圧倒されそうになる。

日本の古墳とは異なる概念に、陵園がある。墳丘を中心とした方形の領域の事であり、城壁で囲まれる。東西南北の城壁の中心に門闕という墓域への入場門が存在する。陽陵の場合、陵園が450m四方、その隣には同規模の皇后陵の陵園があり、2つの陵園を合わせると墓域は1km四方に及ぶ。また、陪葬坑や陪葬墓が無数に存在する。2つの陵園の起点と考えられる羅盤石も見逃せない。

陽陵では1990年代から周辺の発掘調査が行われ、86基の陪葬坑が見つかった。そこから秦始皇帝の兵馬俑をも凌ぐ総数4万もの夥しい数の俑が見つかった。この俑は実際の1/3ほどの比率で作られており、鶴間和幸氏は「秦兵馬俑のリアリズム」に対し「漢代のミニチュアのリアリズム」と評する。漢代は死後の世界へ持ち込むあらゆるものを小さく作った。氏は「奢侈の風を捨て合理性を追求した」結果だと指摘する。

つらつらと述べてきたが、じつは私の考古学人生の原点は、景帝陽陵と皇后陵といっても過言ではない。

1997年に陽陵、1998年に皇后陵をそれぞれ数週間をかけて、測量調査を行った。酸棗や土や汗にまみれて行った調査に参加して、調査員として鍛えられるとともに人生の教訓を得た。巨大な墳丘を相手にした調査は、涙あり笑いあり悲喜こもごも。後にも先にもこれほど濃密な調査の日々を送った経験はない。まさに一生の財産である。

しかし、それから20年経つが再訪できていない。調査の数年後、陽陵のそばに立派な博物館が出来、そこには我々が汗水垂らして作った測量図が展示されていると聞く。麦畑しかなかった陽陵のまわりには、高度経済成長を遂げた中国の勢いそのままに近代化の波が押し寄せているという(にわかには想像できないが)。恩師が元気なうちに当時の仲間と訪れたいというのがささやかな夢である。

辛く苦しいことばかりが脳裏をよぎるが、かけがえのない思い出もたくさん詰まった遺跡。恋い焦がれた初恋の相手のような遺跡が、私にとっての陽陵なのである。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは深川裕二さんです。



▲前漢十一陵の分布図(劉慶柱・李毓芳「西漢十一陵」より茂木雅博が一部改変)

## 考古学者の書棚

## 「日本庭園の歴史と文化」

小野健吉／吉川弘文館(2015)

平田 博幸

ここで取り上げられている「庭園」は、いわゆる「文化財庭園」あるいは「歴史庭園」と呼称されるものであり、現代庭園や都市公園などとは異なるものである。当然のことながら、西洋庭園はまったく該当しない。

埋蔵文化財の発掘調査において、そうした庭園あるいは園池に類する遺跡・遺構の調査に遭遇する機会は希である。故に、「庭園」に関する基礎的な知識を十分に持ち合わせない埋蔵文化財担当者にとって、本書は「庭園」への理解を深める基本書のひとつとなるものである。その趣旨は、古代から中世、近世そして近代までの各時代の庭園について、その歴史的背景とともに文化的な側面も探ることによって、日本庭園の歴史に新たな見地を加えようとされている。

国内で確認されている最古の庭園遺構は、百済や新羅などの朝鮮半島の影響を受けた飛鳥時代のものであり、方池などの幾何学的平面と石積み護岸、さらに猿石・須弥山石などの石像物からなる人工的な庭園デザインであった。奈良時代の平城京への遷都を機に、庭園デザインも大転換される。平城宮で発見された東院の後期庭園は唐の長安城の園池デザインを基盤にしつつ、州浜をはじめとする自然景観要素の導入など日本風のアレンジが完成の域に達したとされている。ここに「日本庭園」の源流があり、その後の平安時代初期における離宮の庭園へと受け継がれることとなる。

先ず、寺院に設けられた庭園のひとつとして、名石「藤戸石」で著名な京都の醍醐寺三宝院の庭園を掲げている。その作庭の始まりは豊臣秀吉によるものであるが、庭の構成や特徴に頁を割いていない。むしろ秀吉の後を受け、26年間に及ぶ作庭活動を継続した座主である義演准后の日記の分析から、庭園の変わりゆく姿を捉えられている。

さらに、永禄8年の京都における事例が掲げられている。足利将軍邸や細川管領邸、寺院などの庭園について、宣教師ルイス・フロイスの記した『日本史』を『上杉本洛中洛外図』によって検証しながら、その構成要素や機能を抽出する。こうした文献資料や絵画から導き出される庭園の構成要素は、発掘調査の遺構・遺物からは想起が困難な無形要因であり、当時の庭園を取り巻く文化や社会情勢を知るうえで看過できないものである。例えば、大徳寺塔頭の枯山水庭園には、四季の草花が多く植えられていたこと。足利将軍邸、鹿苑寺、細川管領邸の各庭園は、静養・慰安、観光資源、接待装置として機能していたこと。さらに『実隆日記』の記述から、室町時代後期におけるユリ・バラの植栽人気を示されており、庭園景観の意外性を感じるところである。

また、寛永期の江戸の庭園については、『江戸図屏風』からその特色が詳細に追求されている。将軍の御成などへの対応として、江戸の有力な大名や旗本の下屋敷には、数寄屋楼閣を伴う池泉庭園が造営されていた。そこには、桂山荘(桂離宮)で確立された回遊式庭園が導入され、それが大名庭園として江戸や諸国の城下町にも造営させるようになった。そのことが、

各地の庭園文化や造園技術の普及・発達に大きな役割を果たしたとしている。

いまひとつ、寺院に付随する庭園として、京都の平等院と浄瑠璃寺などに伴う浄土庭園をあげる。この二寺院に代表される浄土寺院は、仏堂の前面に池を配する臨池伽藍であるが、中国王朝や朝鮮半島にはほとんど存在しない特殊な伽藍配置である。日本での初現は、平城京にあった藤原不比等の屋敷地の曲池を臨池とした阿弥陀浄土院であるとする。『池亭記』や『御堂関白記』などの10世紀後半の貴族の日記などから、「寝殿造庭園+仏堂=阿弥陀浄土を表す庭園」として、平安京内の貴族の庭園に好まれて導入されたと推察する。その結果、平安時代後期から鎌倉時代には全国各地に数多く造営されるが、その背景には源信の『往生要集』に展開される阿弥陀浄土の情景が、大きな影響を与えたことを指摘されている。また、「浄土庭園」は阿弥陀浄土を表現するものであり、日本で独自に成立・発展した臨池伽藍に伴う園池空間を指す用語として規定されている点に、注意をはらいたい。

そうした中、鎌倉時代末期の貴族が理想とした庭園が、『春日権現記絵』に描かれた藤原俊盛邸の庭園であるとされている。水や築山・石組・植栽・動物などが存在する理想の庭園こそが富の世評の象徴であり、野生の生命と子孫繁栄が保証される空間と認識された。この俊盛の庭園は、この時期の上級貴族による典型的な都市文化の象徴であり、人工でありながら本物の自然を取り込むことを欲望する、都市文化の高度な到達点を示すものと意義づけられた。

本書についての興味は、明治期の京都に活躍する小川治兵衛の作庭に係る文書に集約される。庭師の小川は平安神宮神苑の築造に当たり、伏見城に使用されていたと推測される多数の庭石を配した。さらに、臥龍橋には三条大橋と五条大橋の旧橋桁と橋脚を飛石として使用した。こうしたことによって、京都の歴史を濃厚に反映させている。そこには、歴史都市としてあるいは日本庭園文化の中心として、京都で育まれた造園に関する蓄積を最大限に活用している。そして、彼の庭は京都の歴史的風土と近代という時代に織りなされたものであった、と結んでいる。ここに本書の結実を思う。

発掘調査で発見される庭園遺構は、その構成要素の「下部」であり、最も庭園を具現化している「上部」は、すでに失われていることが多くある。本書で述べられているように、思想や宗教、社会情勢、哲学、歴史など庭園を取り巻く人と文化を無視して、発掘された庭園の復元はなし得ない。「庭園」も、その時代の文化の集合体として捉えたい。

## アルカ通信 No.169

発行日 2017年10月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp